

笠原良策とともに種痘普及や洋書習学所設立に力を注いだ。階級の別なく人材を抜擢し封建の主従関係を超えて、国家の統一を夢みた英才である。昭和の戦争により憂国の志士像に作り上げた観がある。

蘭医たちの行動は多岐にわたっていて個々の紹介は割愛せざるを得ないが、主命により医学を軍事的知識の摂取に変更した者も、種痘などには協力を惜しまなかった。従来、蘭医は地方単位で調査されがちだったが、外国の脅威を前にして或は複数の塾に在籍し、藩を超えて協力しつつ多角的に活躍する姿が見られる。その努力が近代的医学の使命を自覚し、学術的組織化の要請を生んだとも見られる。

こうして諸藩、とりわけ海を領内に抱えた藩では必死の防備と砲台築造、反射炉の研究が続き、阿蘭陀別段風説書に予告された通り、嘉永六年アメリカによる黒船、マシユ・カルプレイズ・ペリーの来航を迎えるのである。蘭医たちの行動について、さらに広範囲の調査を今後の課題としたい。

(平成十一年六月例会)

***** 紹介 *****

『大塚恭男論文集 東洋医学の世界』

日本医史学会における東洋医学に関する演題はこの半世紀

の間に年々増加している。かつては東洋医学を蔑視する傾向が強かったが、著者大塚恭男先生の門下の小曾戸洋博士らによる本格的な発表が現われ、可成り様子が変わってきた。しかし東洋医学や漢方に興味や関心を持つ医史学研究者も、未だ異和感があり当惑しているのが現状であろう。そういう方に推奨できるのも、本書の特徴である。私は学生時代から東洋医学と医史学を並行して勉強してきたが、その間にあって、変な言い方だが、私の性に最も合ったのは大塚恭男先生の諸論考であった。なぜか。それは東洋医学という特殊な世界に閉じ籠らず、広く東西にわたる世界的な視野と臨床医史学的な展望が気に入ったのである。従って大塚恭男先生の論著は特に心して集め、読んできたつもりであった。ところが本書を開いて驚いた。私の知らない論著が相当あり、改めて啓発されることが多く、編集の労をとられた花輪・小曾戸両先生らに感謝せざるを得なかった。また、大塚先生と言えば先考の敬節先生が余りにも有名で、やゝもすると恭男先生は親の七光りと思われがちだが、本書によって、出藍の譽であることを知ることができた。

広汎な内容を五章に分けてあるが、細目をキーワードで示そう。第一章 東洋医学について——東洋医学の歴史・中国医学の伝統・古代アジア医学・佐々木隆興・朝比奈泰彦・生命概念・医の倫理・瘀血の証・氣・水・ワルテンシュタイン城。第二章 医史学的考察——傷寒論・千金方・吉益東洞・吉益南涯・医者意也・『東洋洛語』・大槻玄沢の学風（処女作、

一九六七)堀内文書・『適々齋藥室膠柱方』・古代医学史上の甲狀腺腫・テンリーネ。第三章 本草の研究——本草の歴史・東西古代の本草書・臨床実験をふまえた和漢薬研究・附子・甘草・人参・大黃・土茯苓・『本草品彙精要』。第四章 漢方治療の実際——基礎知識・四診のコツ・竹林の養生論争・老人性疾患・不眠・不安・抑うつ・虚弱児・循環器疾患・痛み・消化器疾患。最終章 東洋医学とわたし。ここで本書に記載されている大塚恭男先生の功績を一例だけ引用しておきたい。

「西洋でも恐らく西暦紀元前後までには、トリカブトがサソリ毒を解し、また眼病の治療薬としての効果のあることが認められていた。西洋におけるトリカブトの医的応用は、この水準までは、中国のそれとほぼ雁行して発達する趨勢を示してきたが、その後は全く挫折してしまつて、古代後期より中世にかけて絶大な影響力を誇つたガレノスに至つて殆ど完全に否定的な見解がうちだされたのである。このような相異は一体何に基くものであろうか。この問題の解明はさまざまな角度からなされなければならない。恐らくは東洋医学と西洋医学との本質論に遡らねば解明されないであろうこの疑問を出发点として筆者はこれからの研究を進めていきたいと思ふ」(本書五〇〇頁) 私は本書を「比較医史学序説」と受止め、二十一世紀の日本医史学をトするものである。その意味で本書は『東洋医学の世界』というより『世界の東洋医学』がふさわしいかもしれない。

(多留 淳文)

(本書は非売品。一九九八(平成十年)三月二十一日。発行所は北里研究所東洋医学総合研究所(〒一〇八八六四二 東京都港区白金五一九一))

川村純一 著

『病いの克服—日本痘瘡史』

ジェンナーが牛痘種痘法を発表してから二〇〇年、WHO(世界保健機構)が痘瘡(天然痘)の根絶を宣言してから二〇年。やがて痘瘡の項目が医学書から消えていき、医療関係者からも痘瘡は忘れられた病気となる。人々に忘れられると資料が散逸したり消滅したりする。この様な危惧から「いまのうちに、日本人の痘瘡に関する病歴」について記録しておかなければならない」という著者の思いが力作の本書となった。

第一章「痘瘡の称呼の変遷」では、「疫病」「疾病」「豌豆瘡」「裳瘡」「袍瘡」と時代により変り、現代の学名となっている「痘瘡」は江戸時代から用いられ、幕末から「天然痘」とも呼ばれるようになったことを教えてくれる。

第二章「痘瘡の起源と伝来」では、紀元前二世紀末から四世紀初め頃にインドから中国に伝わり、六世紀中頃に朝鮮に入り、八世紀に九州の筑紫を経由してわが国に広まったと考えている。

第三章「痘瘡の流行」では、痘瘡の流行が政治と社会にと